

校内研修実施報告書

1 研究主題について

研究主題	生きて働く言葉の力の育成 ～向き合う 味わう 楽しむ～
教科・領域	国語科・領域全般

2 研究の経過

本校児童には、自分の思いや考えをもつことや、それらを文章や言葉で相手に伝えることに課題があると考え、令和5年度から教科を国語科とし、研究・研修を行ってきた。昨年度から上掲の研究主題を設定し、3つの柱「授業展開の工夫」「語彙や表現の獲得」「主体的な学び」をもとに、それぞれの学級、学年の児童の課題に応じた研究・研修に取り組んできた。その結果、自ら学ぼうとする児童の姿や課題を達成するために児童同士で学び合おうとする児童の姿が見られるようになってきたと同時に、さまざまな取組を通して、言葉を知る機会を多く作り出すことができ児童の語彙を増やすことにつながった。しかし、自分の言葉で思いや考えを適切に表現し、豊かに伝え合えるといった力には、まだまだ課題が見られ、3つの柱の内容を実現していくために今年度は「主体的に学ぶ子どもの姿」を目指した授業づくりを基盤とし、「言葉を味わう」「言葉を楽しむ」といった次の段階へのステップアップを目指し、研究・研修を進めてきた。また「言葉を楽しむ」学習を通して「国語が好き」と思える児童を育てることを土台としていくことも引き続き、大切にしてきた。

これまでの経過から、今年度は「対話的な学び」を通して、児童の表現力を確かなものにしていくことを試みた。研究の柱となる手立てとして、対話活動における「きく」ことの指導を充実させることに重きを置いた。対話活動において、大事なことを落とさずに「きく」ことで児童は言葉の意味を考え、自分の考えと比べながら「きく」ことで、表現方法を学ぶことにもつながる。また「きいた」ことから疑問をもつことで、どのように質問をしたらよいかを考える。つまり「きく」（聴く（理解しようとして自ら進んで耳を傾ける））と訊く（相手に尋ねる、問う））ことで、「言葉」の力を向上することが期待でき、より豊かに思いや考えを伝え合おうとするのではないかという仮説をたて、日々の実践に取り組み、その効果を検証してきた。

具体的な取組として、朝のモジュール学習を利用した対話トレーニングを通年で、行ってきた。授業での対話活動につなげるための練習（トレーニング）として、児童が話したくなる、聞きたくなる身近なテーマで月2回実施し、相手の思いや考えを最後まで聞き、受け入れるといった「きく」姿勢が身についてきた。また、対話活動そのものにも慣れ、言葉を介して楽しそうに対話をする児童の姿も増えてきた。高学年では、「どのように伝えたらよいか」「どのような質問をしたらよいか」といった言葉にこだわる児童の姿も見られ、表現力の向上につながっていると感じる。授業では、これらの対話トレーニングを活かし、単元計画の中に対話活動を位置づけた授業展開を日々実践してきたことで、自然と対話が生まれる児童

の姿も見られるようになってきた。このように児童の取り組む姿勢や言葉の力の変容を実感することができるのは、今年度、継続して全校で対話トレーニングや授業での対話活動に注力して取り組んできた成果であると考え。その一方で、語彙の少なさや生活経験の差などから、自分の思いや考えを十分に伝えられない児童もいる。また、自分の思いや考えは伝えられても、対話活動を通して考えが広がったり、深まったりするまでには到達しておらず、児童アンケートからもそのような結果が見られた。

国語科での学びが「生きて働く言葉の力」として活用されるには、やはり活用の場を随所に作っていくこと、また、個別最適学習について視野に入れることを念頭に、研究・研修内容を検討していく必要があると考える。言葉の力はすべての教科の中で培われるものであり、国語科の枠を超えてつけたい力を育成していくことが必要である。日常生活に生きた言葉となるよう年間を通した計画的な場の設定であったり、国語科とそれ以外の他教科との双方向のつながりが生まれるようなカリキュラム作成であったり、具体的な取組の検討が必要であると考える。その上で、副題にある「言葉を楽しむ」児童の姿を目指し、研究・研修をさらに深め、積み上げていきたい。

<年間の取組>

一 学 期	4月 1日 (火) 研修部会 今年度の組織体制と役割分担
	4月 3日 (木) 研修部会 今年度の学習環境・家庭学習等について
	4月 7日 (月) 研修部会 昨年度までの研究の経過 今年度の研究の方向性の検討
	4月16日 (水) 第1回全体研修会 今年度の研究の方向性と概要について
	4月17日 (木) 学力学習状況調査 (6年) みえスタディ・チェック (4・5年)
	4月30日 (水) 研修部会 今年度の研究の取組についての検討
	5月 9日 (金) 研修部会 研修実施計画の検討 5月14日 (水) 職員会議 今年度の研究について 研修実施計画の提案・検討 5月28日 (水) 研修部会 ※みえスタディ・チェックの自校採点と分析 (5月13日 (火) までに)
6月 4日 (水) 第2回全体研修会 研修部 授業提案・事前検討会 6月 6日 (金) 第3回全体研修会 研修部 授業提案・事後検討会 6月23日 (月) 研修部会 ※国語科に関する児童アンケート実施	
7月 7日 (月) 研修部会	
8月 4日 (月) 第4回全体研修会 1学期の振り返りと2学期の取組 ※全国学力学習状況調査の結果分析 8月 8日 (金) 研修部会	
二 学 期	9月16日 (火) 研修部会 9月24日 (水) 第5回全体研修会 高学年 (5年生) 提案授業・事後検討会 (事前検討会 9月12日 (金))
	10月27日 (月) 研修部会 10月29日 (水) 第6回全体研修会 低学年 (2年生) 提案授業・事後検討会 (事前検討会 10月21日 (火))
	11月25日 (火) 研修部会

三 学 期	1月 8日 (木) 研修部会 2学期の振り返りと3学期の取組 今年度の研修のまとめについて
	1月 21日 (水) 職員会議 今年度の研修のまとめについて提案 3学期の取組について
	1月 23日 (金) 指導教諭公開授業
	1月 26日 (月) 第7回全体研修会 中学年(3年生)提案授業・事後検討会 (事前検討会 12月17日(水))
	2月 6日 (金) みえスタディ・チェック (5年)
	2月 9日 (月) 研修部会
	2月 18日 (水) 第8回全体研修会 年間総括・来年度に向けて
	2月 19日 (木) 臨時研修部会 来年度の方向性について①
	2月 27日 (金) 臨時研修部会 来年度の方向性について②
	※みえスタディ・チェックの自校採点と分析(2月10日(火)までに)
	※国語科に関する児童アンケート実施
	3月 4日 (水) 研修部会 来年度の方向性について③ 年間総括 研修実施報告書の提案・検討
	3月 11日 (水) 職員会議 研修実施報告書について報告 ※研究紀要の作成

3 具体的な取組について

柱となる3つの取組(1)「主体的に学ぶ子どもの姿」を目指した授業づくり(2)対話活動における「きく」ことに重点を置いた指導の充実(3)学習した「言葉」を活用する場の設定のうち、昨年度進めてきた「主体的な学び」を基盤とし、今年度は「対話活動」を中心に研究・研修を進めてきた。

① 「きく」ことに関するスキルの掲示物を作成し、活用する。

「きく」ことに関するスキルとして「聞き方あいうえお」を作成し、全教室に掲示した。学校生活の日常において児童は「きく」ことによって情報を得ている。その都度、「聞き方あいうえお」を確認することで、聞き手の意識を向上させてきた。また、学年によっては、ペアトークの活動に定期的に取り組んできた。活動の中に「必ず質問をする」ことを課題として与え、「きく」ことに目的をもたせることも大切にして指導してきた。その他、対話の様子を録画して客観的に自身の「きく」姿を振り返ったり、付箋やICT機器を用いて互いの意見や考えを可視化したりすることでより深い対話へとつなげるための工夫をしてきた。

② 朝のモジュール学習を利用した対話トレーニングを年間、継続して行う。

年間12回、毎月2週目と4週目の金曜日(取組期間6月～2月)の朝のモジュール学習の時間に全校一斉に対話トレーニングを行った。全校放送で、対話のテーマを知らせ、3分間～5分間、ペアもしくは3人での対話活動後、クラス全体で振り返りを行う。毎回のテーマは、研修部のメンバーが持ち回りで担当し、テーマ決定までには研修部会で検討し、毎回の反省を活かして次の回へと活かしてきた。毎回のめあてについても検討し、目指す活動に向けて少しずつステップアップを図った。扱ってきたテーマについては、以下の通り。

<テーマ一覧>

- ・席替えをするなら、どここの場所に座りたいですか。
- ・夏休みに出かけたいか、出かけたくないか。
- ・クラスのみんなでやってみいたいこと
- ・もし1日だけ、何か他の生き物になれるなら何になりたい?
- ・運動会はどのくらい楽しみか。楽しみレベル1～4で話しましょう。

- ・秋の食べもので好きなものは？
- ・この秋、やってみたい運動は？
- ・お仕事体験するなら、どのお仕事をやってみたい？
- ・冬休みと夏休み、あなたはどちらが好きですか。
- ・おすすめの〇〇について伝えよう。
- ・みんな笑顔 ～もしもあなたが校長先生だったら…
- ・クラスみんなが最後までがんばれる時間割は…

③ 「対話の練習」の単元を通して、各学年でつきたい力や児童の実態に応じた指導の工夫や手立てを検証する。

全体研修会で、1学期の児童の実態から各学年でつきたい力について話し合った。話し合いをもとに、2学期当初に担当されている単元「対話の練習」の授業計画を練り、実践した。各学年で検討した内容や取組は、以下の通り。

○1年生「みんなにしらせよう」

夏休みにしたことを話し合う活動を行った。自分のことは話したいが、人の話に耳を傾けるのはまだまだ苦手なため、まずは、相手の話を最後まで聞いて質問することを中心に据えて学習を進めた。話すことが苦手な児童も取り組みやすいように夏休みの宿題の絵日記をもとにして話をした。友達が、夏休みを同じように楽しんだことを発見してうれしそうにしていた。

活動は、隣の席の友達以外に3回に分けて繰り返し行った。回数を重ねるごとに上手に話し、お互いに質問することができるようになっていった。

○2年生「ことばでみちあない」

相手を意識して、情報を正しく伝えることを大切に学習を進めた。方角や〇つ目の角など、数や目印になるものを伝えるように意識させ、分かりにくい場合は相手に聞き返すよう指導した。また、対話するペアを入れ替えて繰り返し行うことで、いろいろな伝え方に触れたり、相手が違うことで伝わる感覚が違ったりする経験させた。

○3年生「こんな係がクラスにほしい」

対話を通して合意形成をしていく活動を行った。対話が成立するために、まず自分の考えを持てるよう話し合いの結果を実現できることをゴールとし、身近な課題であることを認識させた。児童が自分の考えを持った上で、同じ目的を持った児童同士でグループを作り、自分の考えと似ているところや違うところを交流しながら一つの係に絞らせた。互いの考えを認めながら考えを広げ、目的や内容などを整理して発表した。

○4年生「あなたなら、どう言う」

自分の考えを深めるための手立てとして、対話を通して姉と弟の両方の立場で双方の思いや考えを想像させた。また、その後どうすれば双方が納得した対話ができるかを考える場面では、ロールプレイを取り入れ、その様子を端末で撮影・録音し、自身が考えた話し方や雰囲気など文字では表されない様子を客観的にふり返らせる活動を取り入れたことで「きく」ことの価値を児童自身が実感できるようにした。

○5年生「どちらを選びますか」

意見を伝え合うときのポイントとして「立場は明確になっているか」「根拠となる資料があるか」「本当にそうなのか」を示した。質疑応答では、それぞれの立場が意見を述べる時間を区切り相手の意見をしっかり聞けるようにした。また、質問に対して即答するのではなく、相手が何を問うているのかを最後まで丁寧に聞き取り、その上で質問の意図を捉え、自分の考えを明確に返すことができるよう指導した。

○6年生「いちばん大事なものは」

相手の意見を肯定的に受け止め、自分の考えに活かすことを大切に指導した。そのために、自分の考えをしっかりと持った上で、3、4人のグループで考えを聞き合う活動を行った。その際、必ず1つは質問することを課題とし与えた。また、数分間、聞き合う活動を行った後、1人か2人を次のグループに移動させ、初めのグループで聞いてきたことを伝えさせた。そうすることで、聞くことの目的を意識させた。

- ④ 単元計画の中に、必ず対話活動を位置づけ「生きて働く言葉の力」を育成するための効果的な指導方法を実践・検証する。
各学年の活動報告書を参照。

4 基礎学力の定着

① 読書活動の充実

語彙を豊かにするためには、読書は基礎であり、欠かせない活動の一つである。以下の目標を設定し、図書館運営にあたった。

- ・本に触れる機会を増やし、学校・家庭での読書習慣をつける。
- ・学びのツールとして活用する力をつける。

朝の読書

週2回(月・水)の朝学習で読書に取り組んだ。この時間に学級で図書ギャラリーに行き、借り換えを行う学級もあったことが、図書の貸し出し冊数増加につながった。

読書記録カード

自分が借りた本を記録し、学期末ごとにふりかえりを行った。1年生から6年生まで継続して行うことで、自分の読書活動の成長を感じられる。子どもの中からは友だちと読んだ冊数を比べたり、「去年は〇〇の本が多かったけど、今年は△△も読んだよ。」などの声があったりした。

読み聞かせ

月1回、朝の読書の時間に、図書ボランティアさんによる読み聞かせを行っていただいた。普段とは違う大人に読んでいただくことで、高学年も絵本の世界を楽しんでいた。

親子読書(ファミリー読書)

2学期に実施。「定期的な実施することで、家庭で読書する習慣づけにつながる。」と保護者から感想をいただいた。

図書ビンゴ

11月に実施。普段読んでいる本のほかの分類にも目を向けるきっかけづくりにできた。

先生・図書委員おすすめの本

1月に行った「おすすめの本」のコーナー展示では、教員および図書委員によるおすすめの本を展示した。先生のおすすめの本については、写真とコメント入りで展示した。普段図書館にあまり来ない児童たちも、先生のコメントを読んでいる姿が見られ、廊下に併設されている図書ギャラリーの利点を感じた。

図書ボランティア・図書巡回指導員との連携

図書ビンゴの景品(しおり)作成や掲示物の作成、読み聞かせ・図書おみくじなど、ボランティアの皆さんにお世話になった。多くの方に協力いただいたおかげで、児童も興味を持って図書ギャラリーを訪れていた。

教科と連携した並行読書

国語科を中心に、総合的な学習の時間や生活科、社会科、その他の教科において、図書ギャラリーを利用した調べ学習をしたり、紹介文等を書いたりする活動を行った。調べ学習での情報の集め方は、クロムブックでの方法が増えてきているが、書籍とインターネットの両

方を使い分ける情報活用能力を身につけさせていく必要がある。両方の利点や注意すべき点を伝え、児童が自分で調べ方を選択できるように準備した。必要な情報があらかじめまとめられている書籍を使うことで、調べ学習の切り口が見つけやすくなっていた児童もいた。また、単元学習との並行読書も行った。1年「海のかくれんぼ」「じどう車くらべ」等の学習では、導入に絵本の読み聞かせを活用した。国語科の教科書の単元最後のページ「この本、読もう」で掲載されている書籍を中心に、単元についての資料を図書ギャラリーや市立・県立図書館で準備し学年棟に配置した。戦争を主たる題材とした教材を学習するときは戦争に関連する書籍を、「やまなし」の学習では「イーハトーヴの夢」など、作者の他の作品も展示した。また、4年生が総合的な学習の時間で認知症サポーターについて学習したときは、以前寄贈された「小さな本棚」の書籍を中心に、認知症に関する書籍を4年棟の近くでコーナー展示した。並行読書を取り入れることで、作品の背景を多角的に想像できていたり、短い休み時間にも他の本を読んでみようとしたりする児童の姿が見られた。いま学習している内容を様々な視点で知ることができ、学習意欲の向上にもつながった。

②家庭学習の取組

宿題については、授業の内容に結びついた課題（主に国語・算数）と音読を各学年・学級に応じて取り組んだ。音読に関しては、目的意識をもって取り組めるように、クラスルームやオクリンクを使った動画の提出や読む視点を意識した読み方など、学年の実態に応じて取組を行った。また、「家庭学習の手引き」を保護者に配布し、家庭学習の意義や家庭での取組ませ方、時間の目安等を保護者に周知することで、学校と保護者が一体となった基礎学力の定着の取組を推進した。同時に自主学習のめあてや約束、内容の例を載せることで、学年に応じた自主学習の取り組み方について提示し、自ら課題を設定し、自主的に学習を進める力を育んだ。

5月に家庭学習強化週間を設定し、落ち着いて家庭学習を行う習慣の定着を目指した。強化週間中は「家庭学習の記録」を使用し、家庭学習に対する児童の意識付けを行った。（1・2年生は紙面に記入、3年～6年はグーグルフォームで回答）また、強化週間中の水曜日をノーメディアデーに設定し、スマホ・ゲームをする時間の目標を児童自らが決めて、自制心の育成に取り組んだ。

自主学習については、各学期（6月・9月と11月・2月）に、2週間の強化週間を設定して取り組んだ。同時に期間中1日、自主学習強化デーとして、普段取り組んでいる宿題を学校から出さない代わりに、1年生～6年生まで学校全体で自主学習に取り組んだ。

各学期の具体的な自主学習の取組は以下の通り。

<1学期：自主学グランプリ>（6月16日～29日）

自主学習へのきっかけを作るための年度初めの取組として実施した。ぱっちりメニューでは「国語部門」・「算数部門」・「他教科部門」、わくわくメニューでは「極め部門」・「へ～！部門」を設定した。自分がエントリーしたい部門を選び、エントリーした自主学習の内容を見合う「自主学鑑賞会」を各クラスで実施した後、担任が各部門で各クラス1名ずつ、グランプリ選考に選出した。最終、児童による投票で各学年の自主学グランプリを選出した。選出された児童のノートは1階ギャラリーに掲示し、全校児童で共有した。

<2学期：自主学ビンゴ>（1回目：9月12日～26日 2回目：11月10日～24日）

昨年度、取り組んだ自主学ビンゴシートを使用し、継続して自主的に学習に取り組める力、自己調整能力の育成を目指して、「自主学ビンゴ」の取組を行った。子どもたちが自ら自主学習の計画を立て、課題を選択して取り組めるような形式にした。実施後には、自分でふり返りを行って、より自分に合った課題を知ることができるようにした。取組期間は、昨年度の反省から内容の向上を図る、児童のやる気の持続を考慮し、2週間に分けて実施した。

<3学期：みんなで自主学>（2月9日～22日）

1・2学期の自主学習の取組の総まとめとして、児童同士で内容や進捗状況を確認しあったり、指導者が児童に評価基準に基づいたフィードバックを行ったりすることで、自主学習に取り組む姿勢を高める目的で行った。期間中、自主学習に取り組んだ児童に対し、評価基

準に基づきB以上の児童にシールを渡す。クラスのみinnでシールを貼り合わせて「旭ライオンくん」の完成を目指すことで、自主学習への取組が難しい児童への意識向上にもつなげた。

これらの取組から、自主学習に対する児童の意識の向上が見られ、自主学習に取り組みにくかった児童が頑張ってやってみようという姿勢になったり、強化週間でなくても自主的に継続して取組もうとする児童が増えたりした。また、学習内容やノートの使い方など、学び方に対する変化も見られた。

③朝学習の取組

今年度、朝学習の取組として、主にモジュール学習を利用したよむYOMUワークシートの活用と対話トレーニングを実施した。(対話トレーニングについては、3 具体的な取組についての項で記載済み)

今年度のよむYOMUワークシートは、前期15回、後期15回で合わせて30回実施する予定であったが、どの学年もその回数を達成することはできなかった。しかし、計画的に実施したことで、以下の成果があったと思われる。

低学年では、文をまとまりで捉えられるようになったことや1マスあける、改行するなど、これから多くの文章を書くときに必要な知識・技能を身につけることができた。

中学年では、文章を早く読めるようになった児童や文章で大切なところが少しずつわかるようになってきた児童もいた。

高学年では、回数を重ねることで読み方、解き方、考え方などに慣れ始め、素早く解答していく児童も多くいた。答え合わせの時には、指導者は、問題文と本文のどこが関連しているのか、どの言葉が必要なのかなど、解き方の指導に重きを置いた。家庭学習で取り組ませると記事の内容をより詳しく解説する児童もいた。

「言葉を知り、使えるようになりたいですか。」という後期の国語アンケートの結果で「とてもになりたい」「できればになりたい」と回答した児童は全学年80%以上であった。児童の思いからも、よむYOMUワークシートのさまざまな文章を読むことで、たくさんの言葉を知り、日常からその言葉を使えるように今後も活用していきたいと考える。

④がんばっ10の取組

取組期間として1週間、1学期・2学期に2回、3学期に1回、学期初めと中間で年間を通して5回実施した。各学年・各学級で取組み方を工夫し、児童への学習規律の意識付けを行った。あくまで児童の自己申告ではあるが、本校での長年の取組であり、学習規律の定着につながっている。

5 その他

4月の学力学習状況調査の後、全職員が問題を解いて調査の内容を把握し、その後、研修部で算数と国語のグループに分かれて調査結果の分析を行った。(理科については指導教諭による分析を行った。)そして、校内の全体研修会で分析から見えてきた本校の学力の強みや弱み、そこから見られる各学年の課題、弱みの改善に向けて、各学年で具体的な授業計画や取組などの共通理解を図った。

分析結果の概要は、以下の通り。

平均正答率については、国語(70.0・全国66.8)算数(62.0・全国58.0)理科(61.0・全国57.1)であり、3教科全てにおいて全国値を上回り、全国値よりもC層・D層の割合は少なかった。特に国語は、昨年度に比べ平均正答率が2.9ポイント改善された。また、C層・D層の値も改善されており、下位層の底上げにつながっている。

国語では、昨年度は「書くこと」の領域や記述式の問題の正答率が低かったが、今年度は記述式の平均正答率が全国値よりも7.0ポイント上回った。しかし、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の全ての領域における「思考・判断・表現等」の項目における選択

式問題の平均正答率が全国値を下回っており、「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができる」かどうかをみる問題に課題が見られた。算数では、問題文の読み違いによる誤答や多くの情報の中から情報を精査し、必要な用語を用いて説明する問題に課題が見られた。国語・算数の両教科における共通点として、以前から課題としていた情報の収集・整理・分析といった情報活用能力の向上が必要であると言える。

児童質問紙からは、平日に1時間以上勉強する割合が一定数はいるが、全国値よりも7.5ポイント下回った。土日に関しても、全国値よりも6.0ポイント下回っており、家庭学習の定着が十分に図られていないことがわかる。毎年、同様の傾向が見られ本校の経年的な課題である。

指導にあたっては、児童の課題に対して職員が共通理解を図り、系統立てて指導にあたっていくため、各学年で2学期当初に担当されている単元「対話の練習」の授業について各学年で授業計画を練った。(※内容については、3 具体的な取組についての項で記載済み)

同様に、三重スタディチェックについても全職員で採点を行い、結果の分析から強みと弱みを把握し、授業改善に活かした。また、独自に作成した国語科に関する児童アンケートを、2年生～6年生で6月と2月に実施し、指導に役立てたり、研究に活用したりした。

6 来年度に向けて

児童が自分の言葉で思いや考えを適切に表現し、豊かに伝え合えるといった力は、決して短期間で身に付くものではない。今年度で国語科の研究・研修を進めて3年目となり、個々の差はあるものの、自分の思いや考えを持つことができる児童、伝えることができる児童が増えてきていると感じる。そして、昨年度よりも「国語が好き」という児童は若干ではあるが数値上増えている。しかし、冒頭でも述べたように自分の思いや考えが伝えられても考えが広がったり、深まったりするまでには到達しておらず、課題が見られる。

そこで、来年度は、引き続き今年度進めてきた「主体的で対話的な深い学び」を追求していくための具体的な方策として国語科を中心に「対話活動」を通して、児童の表現力を確かなものにしていく試みを継続していく。授業の中でどのように「対話活動」を位置づけるか、どのような課題で「対話活動」をさせるか、どのような手立てを講じて効果的な「対話活動」にしていくか、といった点について全職員で話し合い、実践を重ね、研究・研修を深めていきたい。同時に「対話的な学び」と「主体的な学び」は双方向の関係であると考え、「主体的な学び」を基盤としていくことも継続していく。また、本校では、来年度から高学年で教科担当制がスタートする。言葉の広がり求めていくには国語科のみならず、他教科での語彙や表現の獲得、対話活動なども言葉の力の向上には、大きな影響があると考え。教科・領域を他教科へ広げることも検討しながら今後の研究・研修を進めていきたい。

最後に、教員自身も「主体的な学び」が実感できるよう学べる環境づくりを整えることにも注力していきたい。その上で、教員一人ひとりが自分ごととして取り組み、「学ぶことが楽しい！」と感じられる研究・研修にしていきたいと考える。